

十二 火打石

火打石は、日常生活に欠かせなかった。この火打石を、火打鎌（火打鉄）で打ち蒲穂で作った火口ホグチに火を移したものでマッチのない明治以前にはなくてはならない必需品であった。

旅行とか外出には、火打袋に入れて腰にさげたものである。

火打石を、燧石、火燧石とも書いたが、古くは玉火石と書いたものもある。別名で角石カドイシともいった。

その石質や見かけの色合などは、産地や所によって違っていた。

出雲産のものは玉造の碧玉で青味があり、佐渡では赤い瑪瑙や赤玉。江戸などでは諸国のものが、はいつているが、大部分は水戸産の白瑪瑙が使われ、近江では水晶クリンという風に、それぞれ違いがあった。しかし火打石に使った原石が多くは、瑪瑙質の玉石であった。

火打石を玉火石といったのも、そんなところからきているのであろう。

讃岐では近い関係で阿波産の火打石を多く使った。阿波火打は火つきがよい――と古書に出ている。京、大阪方面にも売り出されたもので、色合は青味を帯びていた。

守貞漫稿に、「燧石、京阪ハ淡青ノ石ヲ用ヒ江戸ニテハ白石ヲ用フ……」とあるが、その淡青の火打は阿波火打で、江戸の白石は、水戸産（常州）の火打であった。

重修本草綱目啓蒙によると、火打石の多産国であった阿波では、これを「オホタイカド、京師ニテ阿波ノ火打石ト云」とあつて、「オホタイカド」を方言としている。

阿波国那賀郡、大田井村の山中が、火打石の石切場で、そこから出るのて呼ばれた名「大田井の火打石」という意味の方言である。しかし、火打をカドということは、阿波に限られない。

「佐渡志」にも火打カドと呼んだことが記されている。

四国の土佐も火打石の産地であつたが、この俚言に「吉田ホグチに南場カド」というのがある。「吉田で火口がとれ、南場に火打石が出る……」という俗謡なのだ。してみると、角石（カドイシ）は、方言ではなく、火打石の俗言であり、別名であることがわかる。

火打石には、いろいろ変つたものがあるが、どれも、みな珪質（微晶質石英）のもので、こうした珪質岩を今でも学名として角岩と呼んでいるが、それも、その名残りといえよう。火打石になる珪質岩を鉄槌で打てば貝殻状の断口があり鋭い稜角をあらわすので、角石（角岩）と呼んだものである。石器時代には刃物―ことに矢根石（ヤノネイシ石鏃）に利用したのも、この種の石であつた。

それで、矢根石も、所によつては火打石につかっている。前掲の書に、「江州ニテハ石英（スイシヨ）ヲ用ヒ、濃州ニテハ石奴石（ヤノネイシ）ヲ用ユ……」とあるのがそれで、美濃の国では矢ノ根石を用いたと見える。

ともかく、火打石は隠微晶質の石英から成る鉱物が、その原石となつて用いら

れている。

鉱物学上これらを、チャートと呼んでいる。

チャートは、日本の古生代の地層によく発達しているもので、古生代特有の岩石とされている。

したがって、火打石の産地は古生層の広く分布する地方に多いことになる。

讃岐を除いた四国―阿波、土佐、伊予の国々には古生層が広く露出し、火打石の原石が多いが、讃岐には、古生層のチャートがほとんど見つからない。ただあるのは、石英の礫片に過ぎない。われわれが子供時代に河原などで拾った珪質の礫―白い石英塊―それを「メクラ石」「メクラ水晶」といつて珍らしがり、すり合せ、暗いところで火を出して見たものだった。これというのも、花崗岩のペグマタイト中から出る石英礫以外には、チャート質の岩石が見当たらない讃岐のお国柄を示しているようにさえ思われてならないのである。

ところで、その讃岐に火打石の産地―それが古文献に載っているから、いささ

か私の興味をひいた。

翁媪夜話の西庄、八十蘇水（やそば）のところに、「火燧石、名品、また一種の石あり、これを打てば響、鐘の如し」と述べているし、讃岐名勝図絵にも、それを引用して、西庄の名物―土産品として、火燧石を記載している。

また、新玉藻集に、「火燧石、黒色ばかり、国分の原中にあり」と書いている。そこで私には、この記事がいささか、気になる。はたしてそこに良質のチャ―トがあるのか、なかば、疑念も起る。そこで、二、三度、現地に出かけた。ところが、結局どうも、それらしい原石は見当らなかつた。

西庄は今の坂出―金山の麓で、国分は西山の麓―不思議にどちらも、サヌカイトのゴロゴロする産地である。

西庄では、金山の南―川津へ越える爺ヶ峠の方まで探索して見た。

その爺ヶ峠あたりでは、流紋岩や、それを含んだ、集塊岩―、凝塊角礫岩が分布して、中には、真珠岩や松脂岩様の玻璃質火山岩も見られたが、それがどうも

火打石に恰好のものとも思われなかった。

国分でも、それらしいものは見当たらない。

「黒色ばかり、原中にあり……」との記事だが、西山山麓の原野に散らばる、サヌカイトの小礫片以外には黒いものはないので、或はサヌカイトの黒い小片を、火打石と誤認してのことか、それともこれを、火打石に使用したのかも知れない……と、そう思わざるをえなかつた。

それにしても、翁媪夜話の、「火燧石、上品また一種の石のあり、響、鐘の如し」とあつて一応、火打石とサヌカイトを区別しているのが気になつたが、今でもカン石とサヌカイトを別個のものと考えた人が多いのを考えると、これら文献上の火燧石は、結局、貝殻状断口を示す玻璃質の黒いサヌカイトの礫片、打割ると鋭利な稜角をあらわす、石器時代の矢の根石（石鏃）——その原石のサヌカイト——その石礫の小片を拾つて、火打石としたものではあるまいか……そう思いながらも、私には今もある種の疑問——それが去らないのである。

この外、火打石に関するものとして、地名に打石坂という所があることだ。それは塩江の小地名であるが、塩江雜記によると、昔、弘法大師がこの坂で火を打つ角石を捨てた、それで、今でも、このあたりの石は皆火を出すといい伝えられているという。

また、火打石という地名が、東讃免名録に記載されている。今の三木町の朝倉に火打石という地名のあることがわかった。どういう由来があるのか知らぬが、名が火打石とあれば、何か火打石でも出したところかも知れない。

昔、江戸で使用する火打石は、殆んどが、常州久慈郡諸沢村の金砂山のものが多く、その金砂山を火打石山と呼称するようになったというし、摂津（大阪）の豊島郡と川辺郡の境に横山坂という峠があった。この坂あたりに火打石が知られるようになったので、村民が相談の上、坂の名を火打坂と改めたことが、摂陽群談に記されている。

塩江の火打坂―三木町の火打石―ともかく火打石に関する讃岐の地名なので、

附記して置く。何分識者の教えを仰ぎたいところである。

十三 砥石（といし）

人造のものが多くなつた今では、自然石の砥石も少くなつたが、昔はみな溪谷や山から切出したもので、どこにもその丁場となる砥石山があつて、地方の特産品となつていた。

砥石となる岩石は、砂岩、頁岩、粘板岩、凝灰岩のような堆積岩が多く、それも質が均一的のもので、余り堅くてもいけない。そういう条件が必要なのである。讃岐では「野間田砥」というのが知られていた。

明治初年の新撰讃岐風土記（松岡調氏）に「寒川郡野間田村の大蜂山から出る。世間ではこれを沼田砥という」と欠かれているのがそれだ。

野間田村は、造田村になり、今は長尾町に属している。この砥石を出す、大蜂山、